



東京大学  
THE UNIVERSITY OF TOKYO

# 学内広報

for communication across the UT



特別記事：

「バリアフリーの東京大学」の  
実現に向けて

2006.2.8

No. 1329

本学では、一昨年の平成16年4月にバリアフリー支援室を設置し、バリアフリー支援に取り組んできましたが、さらなる前進を目指して、「東京大学のバリアフリー化の推進について」を昨年11月に決定しました。これは平成13年から開始された全学的な観点からのバリアフリー促進が、新たな段階に入ったという考えに基づくものです。

今回は、バリアフリー支援室の執筆により、現在の学内のバリアフリー支援に関する取り組みを紹介します。また次号以降、今回紹介しきれなかった内容をコラムとして掲載する予定です。

## バリアフリーに関する基本的な考え方

本学は平成14年10月にバリアフリー支援準備室を設置し、平成16年4月に同準備室を支援室に格上げしました。ここで重要なのは「バリアフリー支援」というネーミングです。「障害者支援」ではない点が重要です。というのは、障害者である学生また教職員に対して私たちの社会が築いているバリア（障壁）こそが問題であるという認識が背景にあるからです。今の社会で「障害者」とされている人たちに対して、多くの障壁を私たちの社会は築いてしまっています。そうした障壁こそが問題なのであり、「障害者」が問題なのではないという基本的な認識が重要です。

具体的には、バリアフリー支援の一部は、障害者個人に対する支援という形となることもあります。しかし、様々なコミュニケーション手段や移動方法を使う人がいる社会こそが本来のものであるという認識のもとに、誰もが参加できる社会づくりの取り組みがバリアフリー支援なのです。障害者支援ではなく、「バリアフリー支援」という名称で本学の取り組みが示されている意味を共有して頂きたいと思います。

### バリアフリー支援室の体制

濱田純一理事・副学長が支援室長を務め、室長を含め、全部で18名の支援室員で構成する支援室会議が、本学のバリアフリー支援の方針を決定しています。支援室員には総長補佐に加え、部局からの教員、学生部長、人事部長等の職員が加わっています。

実際に支援のコーディネーションを行う支援室は現在、物理的には先端研に開設されています。これは、盲ろう者である福島智助教授が率いる先端研のバリアフリー分野がホスト役を務めているためです。今後は本郷キャンパス、また、駒場地区では教養学部（先端研からの移転）、さらに将来的には柏キャンパスでの支所の展開を構想しています。

支援室のスタッフとしては、伊藤聡知特任専門職員、中津真美教務補佐員、鈴木真澄教務補佐員の3名が勤務しています。



福島助教授  
(盲ろう者)



指文字通訳者の支援を受けて電話をかける福島助教授



支援室のスタッフ  
(右から中津、伊藤、鈴木)

### 「東京大学のバリアフリー化の推進について」

平成13年から本格的に開始された本学のバリアフリー支援が第2ステージに入ったという意識から、昨年11月にバリアフリー支援室は「東京大学のバリアフリー化の推進について」を決定しました。その中で主な課題として取り上げられている項目の一部を以下に紹介します。詳細は支援室のウェブサイトに掲載されている全文をご覧ください。（アドレス：<http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/office/ds/>）

#### ◆ 障害学生の学習環境のバリアフリー化

学生個人へのきめ細かい対応と、物理的なバリアフリー化推進のための、キャンパス計画室や「東京大学施設のバリアフリー化に関する基本方針」に基づく整備の推進を進めます。

#### ◆ バリアフリー支援室の拡充・本郷キャンパスにおける支援室開室

支援室が毎年開催しているモニター会議（支援を受けている障害学生と障害教職員が支援室に対する意見を述べる場）において、本郷キャンパスにおける支援室の開設の要望が多いため、現在開設されている支援室駒場支所に加えて、本郷支所の開設を推進します。

#### ◆ 障害者雇用の責務

本学は、障害者雇用促進法に基づいて、教職員の総数の2.1%という法定雇用率達成の義務を負っていますが、現在大きく下回っています。雇用率達成は、大学の多様性を確保する好機です。

「東京大学の構成員みなが本学の社会的責務を自覚すること、そして本学の研究教育機関としての積極性と独自性がもっとも発揮されやすい形でバリアフリー化を推進していくことが望まれる」と結ばれています。

## 障害者雇用の推進

「障害者の雇用の促進等に関する法律」（以下「障害者雇用促進法」という。）第37条では、「すべて事業主は、身体障害者又は知的障害者の雇用に関し、社会連帯の理念に基づき、適当な雇用の場を与える共同の責務を有するものであって、進んで身体障害者又は知的障害者の雇入れに努めなければならない。」とされています。

本学も一事業主として、当然、その責務を果たすため、障害者の雇用に積極的に取り組む必要があります。その際には、「東京大学における障害をもった教職員の支援実施要綱」に基づくバリアフリーのための人的・物的支援並びに基本的人権の尊重を明記した「東京大学憲章」の精神を活かすものでなければなりません。

### 障害者雇用の現状

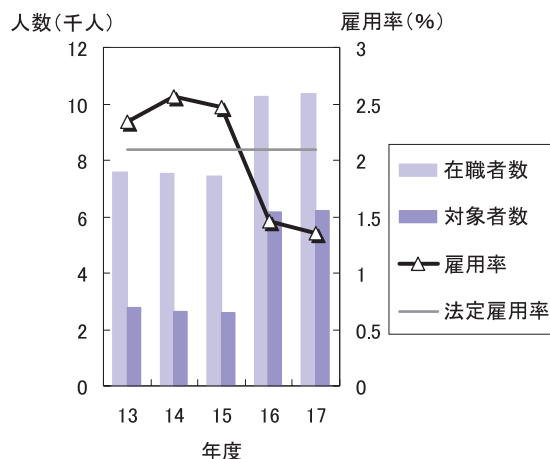
法定雇用率は、平成10年7月1日から一般の民間企業が1.8%、特殊法人等が2.1%となっています。また、平成16年4月1日から除外率制度及び除外職員制度が改正され、国立大学法人は、従前、除外職員であった教育職員及び看護師等が雇用率算定の労働者数に算入され、除外率（原則40%）が適用されました。その結果、障害者雇用率算定の対象者数が増加しました。

障害者雇用率の算定にあたっては、平成15年までは文部科学省全体での管理となっていました。国立大学法人となって、一事業所として個別に算定され、平成16年6月1日現在の本学の障害者雇用率は1.46%となり、法定雇用率を大きく下回りました。

これを受けて、飯田橋公共職業安定所長から障害者雇入れ計画の作成命令が発出され、本学では、平成17年1月1日から平成19年12月31日までの3年間に障害者を新たに46人雇用する内容の雇入れ計画を作成し提出しました。

なお、この雇入れ計画が達成できなければ、適正実施勧告や特別指導を経たのち、企業名の公表措置が取られることもあり、ちなみに平成17年度は、2社が公表されています。

本学における障害者雇用状況



	H13	H14	H15	H16	H17
在職者数(人)	7,588	7,511	7,414	10,265	10,355
対象者数(人)	2,781	2,653	2,591	6,175	6,231
障害者数(人)	64	68	63	90	84
雇用率(%)	2.34	2.56	2.47	1.46	1.35

注1) 法定雇用率 (2.1%)

注2) 平成15年度までは、非常勤職員を除いて算定

注3) 平成16年度からは、特定有期及び短時間（週30時間～）を含んで算定

### 障害者雇用の今後の方針

平成19年末までに46人の障害者を雇用する必要があることから、平成17年度はじめにバリアフリー支援室の下に障害者雇用推進プロジェクト会議を設置し、具体的な雇用について検討を行いました。昨年9月に「東京大学の障害者雇用に係る行動計画」を策定し、次により障害者雇用を推進していくことにしています。

#### ● ヘルスキーパーの雇用

学生及び教職員の健康増進と福利厚生観点から、保健センター駒場支所内にヘルスケアルームを設置し、視覚障害者のヘルスキーパー（あん摩マッサージ指圧師の資格保有者）を雇用します。

#### ● 環境整備スタッフの雇用

現在、業者委託により行っている本郷地区の構内清掃のため、知的障害者を直接雇用し、また、安全衛生面、仕事面、人間関係のみならず生活面についても心配りするコーディネーターを配置します。

#### ● パイロット部局における雇用

経済学研究科では、障害者雇用のパイロット部局となることを決定していただき、世田谷区立知的障害者就労支援センター（すきっぷ）の協力を得て、知的障害者が可能な業務の切り出しを行い、実際に実習生を受入れ、その結果、11月1日付けで1名を雇用しました。

#### ● 部局における障害者雇用の推進

今後、経済学研究科での採用実績の経験やノウハウを全学に周知しながら、各部局において障害者雇用を積極的に行うよう働きかけていきます。

### 障害者雇用の今後の課題

平成14年の法改正により除外率制度が原則廃止され、段階的に縮小されます。現在、高等教育機関である国立大学法人は、除外率40%ですが、仮に10%ポイント引き下げられた場合、本学では、更に20人以上の障害者を雇用しなければなりません。また、本学に在職する障害者の年齢が高いことを考えると、より一層の障害者雇用の推進が必要と言えます。

今後、新たに雇用した障害者の職場定着や新たな職域の開拓などが必要となり、そのためには、働きやすい職場環境の整備が大切です。

## 障害をもった学生・教職員への支援の現状

### バリアフリー支援室のスタッフと支援実施担当者

バリアフリー支援室には、専門性のある3名の職員が、東京大学の障害をもった学生・教職員への支援のコーディネーターとして勤務しています。そして、障害をもった学生からの支援の相談、教職員との連携、支援者や外部の支援団体との連絡調整などのコーディネート業務を行っています。

また、各部局には、障害をもった学生・教職員への支援実施担当者が選任されており、バリアフリー支援室の職員と連携し、必要な支援を行っています。

障害をもった学生・教職員がバリアフリー支援室へ連絡をすると、コーディネーターである職員が、まず支援についての相談を行います。

その後、部局の支援実施担当者や支援者等との打ち合わせをし、支援の準備を行います。支援が始まった後も、コーディネーターは、支援が円滑に行われているかどうか、確認・調整を行います。



### 合理的配慮の提供

障害をもった学生・教職員は、一人一人障害の程度が異なります。そして、必要とされる配慮や支援の内容や必要な時間も人によって異なります。どのような合理的配慮が必要か本人と協議し、どのような配慮が提供可能か、情報提供をする役割もバリアフリー支援室は担っています。支援室は、障害をもった学生・教職員一人一人のニーズを満たすよう、そのコーディネーターが、支援実施担当者や支援者と連携し支援を行っています。

### クオリティの高い支援

支援を行うにあたっては、それぞれの障害をもった学生・教職員のニーズを満たしつつ、常に可能な限りクオリティの高い支援を行わなければなりません。しかし、支援を行うにあたっては相応のコストがかかります。そこで、バリアフリー支援室では、コーディネーターを中心に、日々情報収集や人的ネットワークの拡大に努め、ローコストでハイクオリティな支援を行うことを目指しています。

### 視覚障害者への支援

視覚障害をもった学生・教職員へは、印刷物を点字にする、テープに吹き込む、対面朗読をする、音声で聞けるようテキストデータ化する、などの支援を行っています。また、視覚障害をもった学生・教職員からのリクエストに応じ、視覚障害に基づく不利が発生しないよう、移動時のガイド、書籍の検索などの人的支援を行う他、優先度に応じて点字ブロックの敷設や点字シールの貼付など、バリアフリー化を行っています。



### 聴覚障害者への支援

聴覚障害をもった学生・教職員へは、手話通訳、音声の文字化、磁気ループなどの支援を行っています。また、音声文字化の方法は様々で、手書きでノートに書き取る方法、パソコンで話し言葉を要約しながら入力する方法、コンピューターに音声を認識させて文字化する方法などがあります。



### 肢体不自由者への支援

肢体不自由の学生・教職員へは、支援に必要な器具の貸し出し、支援者の手配、段差などの物理的なバリアの解消などの支援を行っています。教室変更などによるアクセスできる教室の確保の他、必要に応じてエレベーターやスロープの設置の働きかけも行います。

### 東京大学のバリアフリーの窓口

バリアフリー支援室では、上記のような支援を行っている他、重複障害と呼ばれる、上記の2つ以上の障害を併せもった教職員への支援、昨年11月からスタートしている知的障害者の雇用に対する支援など、「東京大学のバリアフリー」に関する窓口となっています。

## バリアフリーを取り巻く国内外の動き

国内外で、①障害者と非障害者が共に学び、働くというインクルージョンの推進、②学習や労働の場での障害者のニーズへの対応である「合理的配慮」の提供の義務化、③障害者自身の決定への参画推進、という大きな動きがあります。これは本学としてのバリアフリーの推進に当たっても、当然考慮しなければならない点です。以下、国内については障害者基本法の改正、国外については障害者の権利条約交渉について取り上げます。

### 障害者基本法の改正

日本の障害分野での最も基本的な法律である障害者基本法は平成16年に改正され、第3条（基本的理念）で障害を理由とする差別を禁じました。教育については、第14条で障害のある生徒と非障害の生徒の「交流及び共同学習を積極的に進めることによって、その相互理解を促進しなければならない」としました。また、第24条、第25条では内閣府に中央障害者施策推進協議会を置くこととされ、委員に障害者代表の参加を求めました。本学からは盲ろう者である福島智助教授（先端研）が委員として加わっています。また、注目されるのは、従来、知的障害分野では家族が代弁することが多かったのですが、知的障害者自身の代表が委員に選出され、支援者と共に委員として活動していることです。

### 国連での障害者の権利条約交渉の進展

平成13年（2001年）の国連総会決議に基づいて設置された国連総会特別委員会では、障害者の権利条約の交渉を加盟国が進めています。国連の人権分野では、女性への差別撤廃に関する条約や、子どもの人権条約が策定されてきましたが、障害者の人権を保障する国際条約は未だに策定されていません。

この条約制定過程の非常に大きな特徴は、障害者組織の代表が積極的に参画していることです。それには①NGOと呼ばれる非政府組織の代表として独自に参加する（写真参照）、②政府代表団に障害者組織代表が加わる、という二つの形があります。日本政府代表団にも日本の障害者組織からの推薦を受けて、車いすを使う弁護士が顧問として加わっています（写真参照）。

高等教育のバリアフリーに関しては、昨年10月に公表された議長による条約草案の第24条〔教育〕で、「締約国は、障害のある人が、差別なしにかつ他の者との平等を基礎として、一般の高等教育、職業訓練、成人教育及び生涯学習を利用することができることを確保する。このため、締約国は、障害のある人に適当な支援を与える」としています。

この最後の「適当な支援」はこの条約で規定されようとしている「合理的配慮」の提供義務と密接に結びついています。合理的配慮の提供義務とは、障害者のニーズへの対応を義務づけるものです。これを大学で考えると、例えば、視覚障害学生に対しては、その学生の必要に応じて、教材の点訳化やデータ化、教材の拡大コピー、朗読を行う必要があります。車いすを使う学生・教職員については、スロープや車いす用のトイレの設置が必要となります。聴覚障害の学生には必要に応じて、筆記や、手話通訳の提供が求められます。

国際人権法の分野では、こうした「合理的配慮の欠如」が障害者に対する差別であるという解釈もあり、条約草案は、こうした合理的配慮の提供の確保を政府に求めています。

#### 国連障害者の権利条約特別委員会 での出席者の様子



障害NGO代表：  
パナマの知的障害者



障害NGO代表：ザンビアの知的障害者（右）と支援者（左）



日本政府代表（右）と 車椅子を使用する東俊裕弁護士（左）

### 平成21年の障害者基本法の見直しと障害者の権利条約の批准

障害者基本法は附則（検討）で、改正後5年をめどに、「必要な措置を講ずるものとする」とし、次回の改正が平成21年には見込まれています。また、障害者の権利条約の国連総会での採択は遅くとも来年平成19年末には見込まれ、その後、日本政府も国会での批准を進めることとなります。

近年、企業の社会的責任がよく言われていますが、国立大学法人としても、バリアフリーの推進を求められる中、社会的責任のみならず、高等教育機関としての本来の役割を果たす上で、本学がこの好機をいかに活かすかがまさに問われています。

東京大学のバリアフリー化は、構成員であるすべての学生・教職員の協力なしでは成り立ちません。皆様方のご協力をお願いするとともに、大学のバリアフリーについて、御意見・御要望を、バリアフリー支援室まで遠慮なくお寄せください。

＜東京大学バリアフリー支援室 連絡先＞

TEL:03-5452-5067 FAX:03-5452-5068 E-mail:spds-staff@mm.itc.u-tokyo.ac.jp

# NEWS

## 一般ニュース

学生部

平成18年度大学入試センター試験終わる一本学は7試験場200試験室でー

平成18年度大学入試センター試験は、1月21日（土）、22日（日）の両日にわたって実施された。

全国の志願者数は551,382人で、国公立大学及び大学入試センター試験に参加した私立大学と公私立短期大学で一斉に行われた。

本学では、10,675人の志願者が、本郷・駒場の両キャンパスと都立高等学校1校（白鷗）・私立高等学校4校（富士見丘、海城、東京女学館、開成）の7試験場200試験室で受験した。第1日目の「外国語」では、9,430人が受験し、志願者総数に対する受験率は88.3%（前年度89.6%）であった。

なお、今回より導入された英語のリスニングテストにおいて、ICプレーヤーの故障等による再テストを7名に対し実施した。

学生部

東京大学初主催「卒業生による業界研究会」を開催

1月28日（土）13:00から、本郷キャンパス御殿下記念館ジムナジウムにおいて、本学の学生を対象とした卒業生による「業界研究会」が開催された。

初の本学（キャリアサポート室）主催となる今回の行事は、各業界を代表する企業22社、財務省等の4省庁の本学卒業生を招いて行われた。当日は、「業界研究」「企業発見」コーナー、「内定者懇談」コーナーやキャリア

アドバイザーによる「キャリア相談」コーナーなど盛り沢山の企画が用意され、2007年卒業・修了予定の405名の学部・大学院学生が参加した。

業界研究会は、2月18日（土）、3月11日（土）にも開催される予定となっており、詳細及び申込みについては、キャリアサポート室ホームページに掲載されている。学部学生・大学院学生・研究生の方におかれては、「業界研究会」の場をご活用いただきたい。

キャリアサポート室ホームページ：

<http://www.careersupport.adm.u-tokyo.ac.jp>



学生達で活気あふれる業界研究会の様子

赤門で消防演習が行われる

1月25日（水）、本郷キャンパスの赤門において、東京消防庁本郷消防署、付近町会消防団、東京大学との共同により消防演習が行われた。1月26日の「文化財防火デー」に合わせて本郷消防署が行っている「本郷の文化財を守れ消防演習シリーズ」の一環として行われたもので、同署によると赤門でこうした演習が行われるのは初めてだという。

「文化財防火デー」は、昭和24年1月26日に奈良県法隆寺の金堂で火災が起き、白鳳時代に描かれた十二面壁画が消失したことを由来としている。この火災をきっかけに昭和25年に文化財保護法が制定され、昭和30年から1月26日が「文化財防火デー」と定められた。以来「文化財防火デー」には、文化財の防火設備の点検と整備を行うとともに、消防演習などを実施して文化財を火災から守る運動が展開され、今年で52回目を迎えた。

本郷消防署では、この文化財防火デーに合わせて毎年「根津神社」で消防演習を行ってきたが、より広く、管内の住民に近隣の文化財についての認識を深めてもらい、火災予防意識をもってもらうことを目的として、本年は根津神社に加えて「湯島聖堂」「湯島天神」そして「東大赤門」でも演習を行うこととなった。



消防士による本番さながらの演習は大迫力

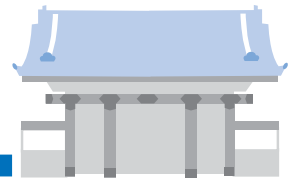
当日は赤門付近にポンプ車、はしご車などの消防車が配置され、本学の総務部、学生部、環境安全本部などの職員、警備室も参加して演習が行われた。訓練用の煙が焚かれ、自衛消防隊の消火器による初期消火と119番通報の訓練の後、消防隊が一斉に放水を行った。演習であるため赤門の壁や屋根に直接放水することはしなかったが、4本のホースから大量の水が赤門上空に向かって吹き上げられた。放水と同時に、高く伸ばされたはしご車の上からは「文化財防火デー」と書かれた垂れ幕が掲げられ、通りがかった地域住民の方の注目を集めていた。



赤門の屋根に一斉に弧を描く水流

演習終了後、本郷消防署からは「火災発生時には、すばやい初期消火と119番通報、安全な避難誘導が重要であり、またそのためには普段からの訓練が必要です。消防署、地域住民、大学が一体となって、この町の文化財を火災から守っていきましょう」との呼びかけがあった。

## 部局 ニュース



大学院法学政治学研究科・法学部

部局

日英プロジェクト第2回AJA、英国ウォーリック大学で開催される

21世紀COEプログラム「先進国における《政策システム》の創出」と大学院法学政治学研究科附属比較法政国際センターは神戸大学21世紀COEプログラム「市場社会の法動態学」研究センター、ウォーリック大学、シェフィールド大学との共催により1月7日（土）～12日（木）、第2回Anglo-Japanese Academy (AJA) を英国ウォーリック大学コンファレンスセンター・スカーマンで開催した。

今回のプロジェクトは2001年9月にシェフィールド大学で開催された第1回AJAでの成果をもとに、本COEプログラム事業の一環としての若手研究者の養成、本センターの国際学術交流の推進を目的に実現したものである。全体テーマを‘Globalisation, Regionalisation and National Policy Systems’とし、シニア研究者の基調講演、国際シンポジウム、日英の大学院博士課程在籍者のためのワークショップで構成され、また、国立フィルムセンターの協力を得て、日本最初の合作映画“BUSHI-DO”（日独1926年）も上映された。基調講演では、石井紫郎本学名誉教授とイアン・ニッシュ ロンドン大学LSE名誉教授が、高橋進本学教授、及びグレン・フックシェフィールド大学教授の司会により報告を行った。



国際シンポジウム  
ラウンドテーブル・ディスカッション

2日目の国際シンポジウムでは、第1セッション「東アジアとヨーロッパにおける新しい政策システム」をテーマに、第一部は、菅英輝西南女学院教授の司会により、遠藤乾北海道大学助教授、アンドリュー・ギャンブルシェフィールド大学教授、クリストファー・ヒューズウォーリック大学リーダーが報告、ヒューゴ・ドブソン

シェフィールド大学上級講師、吉田徹日本学術振興会特別研究員のコメントが行われた。第二部のラウンドテーブル・ディスカッションでは、2時間にわたり、活発な意見交換が実現した。第2セッションは「ジャーナリズムの政治的役割」をテーマに、外岡秀俊朝日新聞ヨーロッパ支局長と谷口将紀助本学教授の報告後、フロアからの質疑応答が行われた。3日目は日英の若手研究者(AJAフェロー)を対象としたトレーニングとして、日英の高等教育の現状について、月村太郎神戸大学教授及びマイケル・ウィットビー ウォーリック大学教授の講義の後、プレゼンテーションの方法、研究者倫理等について、ウォーリック大学の専門教員から指導を受けた。



トレーニング

4日目から2日間はワークショップが行われ、日英のAJAフェロー18名は予め提出した英文ペーパーに基づき、プレゼンテーションを行い、司会を網谷龍介神戸大学教授、田村哲樹名古屋大学助教授、五百旗頭薫首都大学東京準教授、小館尚文 本COE特任研究員のシニア・フェロー(2001年第1回AJA フェロー)、そして元田結花 本COE特任講師が担当し、シニア・若手研究者の間で、コメントとディスカッションが行われた。

全日程使用言語を英語で行っている本プロジェクトは、前回以上に大きな成果を得た。この成果は会議報告集として、本センターより刊行予定である。



ワークショップ

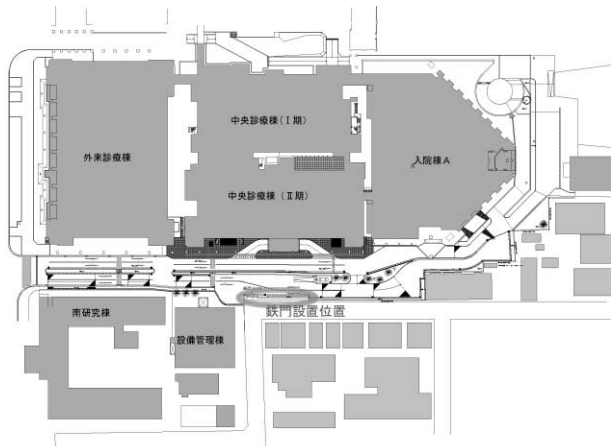




**医学部附属病院**  
**新たな通用門の名称が「鉄門」に決定**

このたび、医学部附属病院では、新たに建設中の通用門の正式名称を「鉄門」とすることに決定した。

この通用門は、現在、中央診療棟Ⅱ期建物外構整備工事に併せて、会議所建物跡地（旧好仁会事務室跡）の無縁坂に面した場所に建設中のものである。中央診療棟Ⅱ期建物の竣工と同時に「緊急車両用出入口及び人の出入口」として使用される。



新設場所の図面

この新設門の名称は、明治10年（1877年）、医学部創設時に現在の南研究棟（赤煉瓦と呼ばれていた）と設備管理棟の間にあった旧医学部本部棟の「表門」（後の鉄門）に由来している。当時の鉄門は瀟洒な格子模様の両開扉で教員、学生及び患者様等の通用門として重要な役割を果たしていた。大正7年（1918年）、本学が鉄門外の民有地を購入したため、大学の敷地を鉄門と塀で区切っておく必要がなくなり、撤去されるに至った。が、それまでの間、医学部のシンボルとして永く親しまれていた。明治後期まであった大学正門（木製）より、はるかに立派であったと伝えられている。



完成予想図

今回新設する「鉄門」の付近には、どんぐりの木で知られる榎の木（シラカシ）が植栽される予定である。当時の面影を今に再現するこの門が完成すれば、千代田線湯島駅へのアクセスも便利になり、往年の鉄門のごとく、広く人々に親しまれる存在になるであろう。

「鉄門」の新設および命名にあたっては、関係部署及び近隣住民の方々の多大なご尽力と、ご理解を得て、実現の運びとなったことを報告するとともに、深く謝意を表したい。

**大学院総合文化研究科・教養学部**  
**大学院総合文化研究科・教養学部第二期運営諮問会議、開催される**

大学院総合文化研究科・教養学部では、1月24日（火）駒場キャンパス内のアドミニストレーション棟大会議室において、第二期運営諮問会議（第1回）を開催した。委員（順不同）は、安藤忠雄（建築家・本学特別荣誉教授）、緒方貞子（国際協力機構理事長）、下條信輔（カリフォルニア工科大学教授）、遠山敦子（新国立劇場運営財団理事長）、蓮實重彦（元本学総長）、毛利衛（日本科学未来館長）、森稔（森ビル株式会社代表取締役社長）の各氏（敬称略）。



運営諮問委員会のメンバー

冒頭、木畑洋一研究科長から、教養教育の強化、短期交換留学制度（AIKOM）の拡充、東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブの推進、学際性と国際性を重視した国際関係、地域研究分野の開拓及び外国語教育重視等、総合文化研究科・教養学部の運営の現状と将来計画についての報告がなされた後、次の諮問事項について説明及び審議依頼があった。①総合文化研究科・教養学部における教育の国際化について。②総合文化研究科・教養学部における新しい学問の方向について。③社会連携・地域連携のあり方について。初回である今回は、蓮實議長を選出し、教育の国際化について、適宜、研究科・学部側が現状について情報を提供しながら関連な審議が行われた。各委員からは、現在推進している国際化への対応をより拡充させるために積極的に外部資金を獲得すること、外国語教育の拡充のためのネイティブ・スピーカーの増員、AIKOM制度による交換留学生の増員と教員組織のより高度な活用等、貴重な意見並びに要望

がだされ、次回以降も引き続き審議を行うこととした。

なお、同諮問会議は、今後3回にわたって審議を重ね、来年4月以降、答申をまとめる予定となっている。



大学側出席者

大学院総合文化研究科・教養学部

部局

三鷹国際学生宿舎で「新年会」開催される

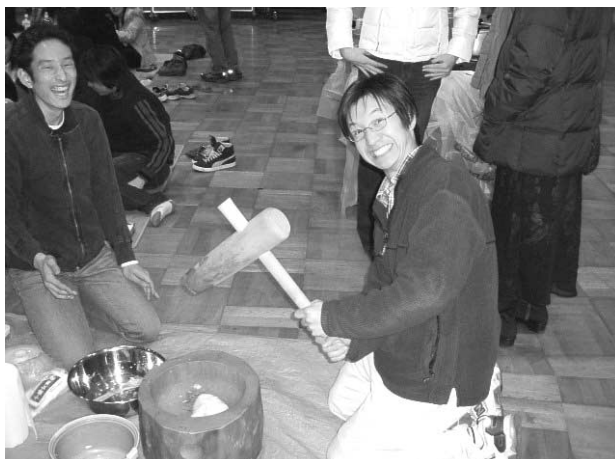
1月8日（日）、三鷹国際学生宿舎の共用棟ホールにおいて、院生会（留学生の生活をサポートするための大学院学生によるチューター組織）の主催により新年会が行われた。この催しは、宿舎に入居している留学生に日本の伝統的な正月行事や遊びなどを紹介し、日本の文化や正月の雰囲気に触れてもらうことを目的として毎年行っているものである。新年を宿舎で過ごしていた留学生約40名を含む約50名の宿舎生が参加して、日本の正月を満喫した。



百人一首の手ほどき

当日は、ホール内に、書き初め、百人一首、いろはかるた等のコーナーを設け、留学生に正月遊びを体験してもらった。

書き初めコーナーでは、留学生が各自の母国語で一筆したため、相互に作品を紹介しあって盛況であった。百人一首のコーナーでは、その成り立ちや古来日本における和歌の役割などを紹介し、現代にも残る遊び方を披露した。上の句が読まれ、下の句が読まれる前に札を取り合うという高度な遊び方には感嘆の声が上がった。日本語をそれほど習熟していない留学生には、いろはかるたのコーナーで楽しんでもらったが、理解しやすく大変好評で、多くの留学生が参加し熱戦が繰り広げられた。



餅つきのコマ

また、日本の正月に欠かせないものとして、小型の杵と臼を用意し餅つきを行い、つきたての餅で雑煮を味わってもらった。殆どの留学生にとって初めての味覚体験であったが、こちらも好評であった。

遊びの合間には、こたつコーナーでミカンを食べながら各国のNew Yearの過ごし方を語り合うなど談笑し、留学生同士、また留学生と宿舎生との間での交流を大いに楽しんだ。



貴重な「こたつ体験」を楽しむ留学生達

三鷹国際学生宿舎には、宿舎生の3割、約180名の留学生が入居しているが、こうした活動を通して、学生間での国際交流が着々と進んでいる。



つきたての餅を調理

## 大学院教育学研究科・教育学部

### 教育学部附属中等教育学校で三者協議会開催

1月28日（土）に教育学部附属中等教育学校で今年度3回目の三者協議会が行われた。テーマは「ルールと意識～学校生活における様々な問題意識を通して パートⅡ」。前回もこのテーマについて話し合ったものの結論が出なかったため、生徒、保護者、教員のそれぞれが問題を持ち帰って話し合った。それを受けて再び三者で話し合うことになったものである。「今回は（それぞれの話し合いの結果をまとめた）三者の資料がそろっているのですね！」という声も聞かれた。出席者は合計96名（生徒33名、保護者35名、教員22名、外部4名）で、前回と比べてかなり多数の参加者となった。

まず、三者の代表がそれぞれの資料を簡単に説明し、話し合いが進むうちに内容はルール全般から帰宅時間が遅いという問題に絞られていった。「部活は何時に解散しているのか」という質問に対して、部活動の部長を務めている生徒たちが「僕たちの部活では6時には練習を終え、6時15分には解散出来る様にしています」「練習を終えるのは5時半頃。その後話し合いをすることもあります」などと報告。それでは「なぜ保護者会で問題になるほど帰宅時間が遅くなってしまうのか」ということに話が進んだ。そこで、三橋俊夫副校長から「問題は部活が終わる時間ではないのではないかと。まれに大会前で遅くまで練習するクラブもあるが、生徒たちは部活が解散した後も、残ってしゃべっている。『なんでこんなに学校が好きなのだろう』と思うくらいだ」という発言があった。これに対し、生徒たちは「確におしゃべりが楽しくて、活動後に残っていることが多い」ことを認めた。下校時間が遅いのは、顧問の先生や部長の責任ではなく、解散後のおしゃべりが第一原因だということがしだいに明らかになっていく様子は、謎解きのような様子であった。



活発な議論が展開された三者協議会

その後、三者から「上級生が模範を示し、下級生に声かけして欲しい」「家庭が楽しければ生徒は家に帰るはず。家庭生活を充実させて欲しい」「部活後お腹が空いてしまうので自販機を用意して欲しい」「各家庭で帰宅時間について話し合っていたきたい」など様々な意見が出された。今後、今回の話し合いを踏まえ、前回より一歩前進した形で三者が三様に話し合いを進めていくこととなる。

今回の協議会には、三者協議会を立ち上げようとしている東野高等学校（入間市）の保護者3名、および東京経済大学の谷川捷先生が出席された。最後に谷川捷先生が言われた「生徒自ら学校作りに参加できる機会は珍しい。話し合いを重ね、学校が少しずつ変わっていくという体験が出来ることを羨ましく思いました」という感想が印象的だった。

## 地震研究所

### パキスタン上院議員訪問団が地震研究所を来訪

パキスタン上院議員のMushahid Hussain Sayed（上院外交委員長）を団長とする日本訪問団一行（随行者含め9名）が、日本の政治・経済・教育・文化等の実情の視察のため外務省南西アジア課の招聘により来日し、その視察先のひとつとして地震研究所を1月19日（木）に訪問された。

訪問団の来訪にあたり大久保修平所長が一行を出迎え、歓迎の挨拶を述べたのに引き続いて、大久保所長からわが国やアジア地域が置かれている状況、地震発生のしくみやその原因、ならびに地震研究所の使命、研究活動の概要について説明した。また、最近の地震研究所のプロジェクトの中から首都圏一帯で平成14年度から実施している大都市大災害軽減化特別プロジェクト：大都市圏地殻構造調査研究計画の目的や結果について平田直教授が説明した。



パキスタン上院外交委員日本訪問団を  
出迎える大久保修平地震研究所長

パキスタンでは昨年10月8日に北部でマグニチュード7.6の大地震が発生し、震源付近だけでなく首都イスラマバードでもビルが倒壊するなど甚大な被害があった。現在でもなお多数の住民がテントで避難生活を余儀なくされている状態が続いている。このパキスタンでの地震災害の状況を調査するため日本から調査団が派遣されており、この調査団に加わった小国健二助教授と真田靖助手が調査結果についてそれぞれ説明した。



説明に聞き入る訪問団（左から2人目がフセイン団長）

訪問団一行は地震活動やプレートテクトニクスのみならず、地震が発生した際に狭い範囲でなぜ被害が偏るかなど専門的な事項に強い関心を示され、ときにより説明をさえぎるほどの熱心さで次々と質問を出された。

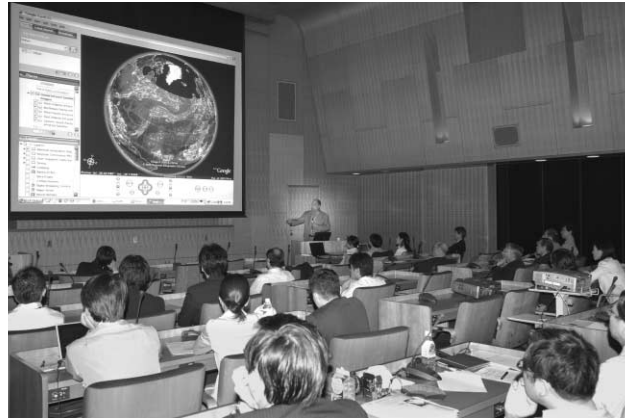
### 今後の学内広報発行スケジュール

号数	原稿締切日	発行日	配布日
1330	2月15日（水）	2月22日（水）	2月28日（火）
1331	3月1日（水）	3月8日（水）	3月14日（火）
1332	特集号（予定）		
1333	3月15日（水）	3月22日（水）	3月29日（水）

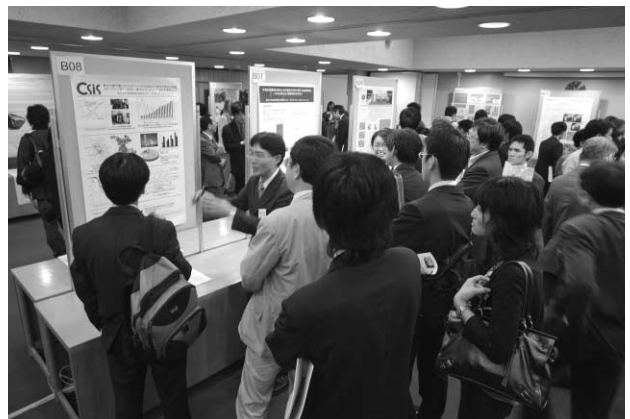
※平成18年度発行スケジュールは13ページ

## 空間情報科学研究センター 空間情報科学研究センター第8回年次 シンポジウムを開催

平成17年9月27日（火）～28日（水）の2日間、山上会館にて、空間情報科学研究センターの第8回年次シンポジウム（CSIS DAYS 2005）が開催された。参加者は2日間で延べ338名で、ほぼ満員で大盛況であった。今年度のシンポジウムでは参加申し込みをウェブで行なったため、開催日の2週間前には定員を大きく上回り、大勢の方々の参加をお断りせざるを得なかった。



Michael T. Jones 氏  
（Google Inc., Keyhole CTO）の講演



「全国共同利用研究発表大会」での  
ポスター展示セッションの様子

初日の午前には海外の著名な研究者による「招待講演」セッションで、2件の講演が行われた。最初の講演は、Google Earthの中心的開発者であるMichael T. Jones 氏（Google Inc., Keyhole CTO）による「The Challenges of Global Geospatial Visualization」、次の講演は空間解析の大家であるDuane F. Marble 氏（オハイオ州立大学地理学科名誉教授）による「Some Remarks on the Status of Research in Geographic Information Science and Technology」であった。二人とも世界的に有名な研究者であり、当日は立ち見が出るほどの盛況であった。

初日の午後の「空間情報社会フォーラム」セッションでは、特別講演として柴崎亮介センター長の「空間情報社会：研究フォーラムの目指すもの」、および基調講演として野村総合研究所理事長の村上輝康氏による「ユビキタスネットワーク化と空間情報社会」の講演が行われた。

2日目は、「全国共同利用研究発表大会」セッションであり、5つのサブセッション「地形学と水文学」「都市環境」「GISと教育」「空間情報サービス」「空間ITと要素技術開発」に対して44件の発表が行われた。なお、本発表大会の特徴は以下のとおりである。

(特徴1) 短時間かつ平易な研究アブストラクトの発表

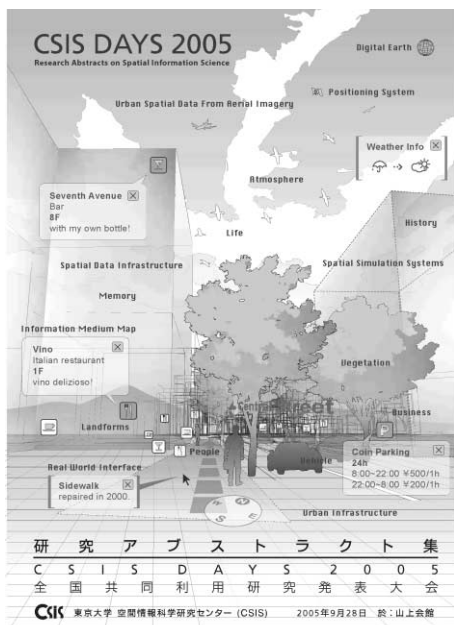
一般の方々（民間、政府、行政機関のGIS関係者、学部学生など）が、大学や研究機関の空間情報科学に関する研究を短時間で、より多く知っていただけるように、発表時間は1件5分とした。また、一般の方々に理解しやすい内容にするために、説明は平易にすることを旨とした。

(特徴2) 詳しい内容はポスター展示で

より詳しい内容を知りたい方々のために、研究アブストラクトの発表後に、ポスター展示を行なった。発表者との対話を通じて内容理解の深化が図れるよう工夫した。

(特徴3) 研究アブストラクト集の作成

発表者の研究が視覚的に理解できるように、地図あるいは図を多用した研究アブストラクト集を作成した。この研究アブストラクト集は、研究の価値や位置付けを一般の方々にも容易に理解していただけるように(1)動機、(2)アプローチ、(3)新規性、(4)特徴、(5)結果、(6)使用したデータとソフトウェア、という統一した項目を設定するなどの配慮を施した。



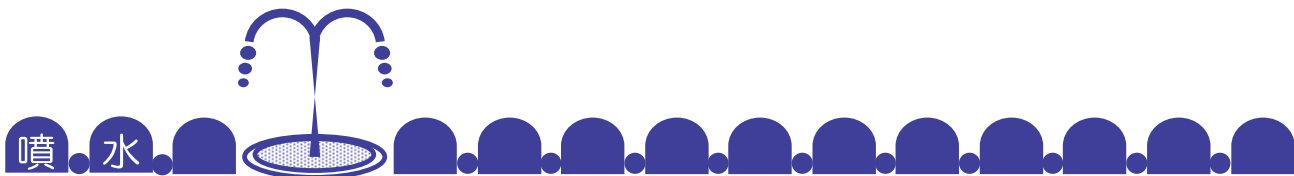
「全国共同利用研究発表大会」  
研究アブストラクト集の表紙

なお、CSIS DAYS 2005の詳しい内容はホームページ、より閲覧できるので、是非ご覧いただきたい。

アドレス：<http://www.csis.u-tokyo.ac.jp/sympo2005/>

平成18年度の学内広報発行スケジュール

号数	原稿締切日	発行日	配布日
1334	4月5日(水)	4月12日(水)	4月18日(火)
1335	4月19日(水)	4月26日(水)	5月8日(月)
1336	5月10日(水)	5月17日(水)	5月23日(火)
1337	5月24日(水)	5月31日(水)	6月6日(火)
1338	6月7日(水)	6月14日(水)	6月20日(火)
1339	6月21日(水)	6月28日(水)	7月4日(火)
1340	7月5日(水)	7月12日(水)	7月19日(水)
1341	7月19日(水)	7月26日(水)	8月1日(火)
1342	9月6日(水)	9月13日(水)	9月20日(水)
1343	9月20日(水)	9月27日(水)	10月3日(火)
1344	10月4日(水)	10月11日(水)	10月18日(水)
1345	10月18日(水)	10月25日(水)	10月31日(火)
1346	10月31日(火)	11月8日(水)	11月14日(火)
1347	11月15日(水)	11月22日(水)	11月29日(水)
1348	学生生活実態調査特集号(予定)		
1349	12月6日(水)	12月13日(水)	12月19日(火)
1350	1月10日(水)	1月17日(水)	1月23日(火)
1351	1月24日(水)	1月31日(水)	2月6日(火)
1352	2月7日(水)	2月14日(水)	2月21日(水)
1353	2月21日(水)	2月28日(水)	3月6日(火)
1354	3月7日(水)	3月14日(水)	3月20日(火)



## 教育学部附属中等教育学校で「音楽祭」開催される

1月21日（土）午後、ティアラこうとう（江東区公会堂）において「音楽祭」（前期課程評議委員会主催）を開催しました。大雪にも関わらず、保護者の方々も406名来訪されました。

この音楽祭は、1年～3年の合計9クラスで、課題曲・自由曲を混声合唱で競うものです。11月から練習を重ね、当日はその成果を披露しあいました。冒頭、汐見稔幸校長から「日本の学校教育に音楽を取り入れたことによって、このような催しができることは素晴らしい」との開催の辞がありました。

課題曲として課されたのは「自分らしく」（1年生）、「名づけられた葉」（2年生）、「春に」（3年生）でした。自由曲は各クラスの選んだ曲で、合唱曲や歌謡曲（混声合唱ができるように直した曲）などさまざまでした。

総合順位は、1位3年B組、2位3年A組、3位2年C組となりました。課題曲、自由曲のそれぞれでも下記のような順位が発表されました。優勝クラスは、アンコールでも見事なハーモニーの合唱を聞かせてくれました。



アンコールに答える3年B組の生徒たち

また有志3グループがピアノ・チェロ・バイオリン・フルートを演奏して場を盛り上げました。

おわりに、三橋俊夫副校長から「練習中の様々なドラマを経て、今日、どのクラスも成果を発揮できたことは賞賛に値する」との言葉がありました。

総合順位	課題曲部門	自由曲部門
1位3年B組 「sign」	1位3年B組	1位3年B組
2位3年A組 「青いベンチ」	2位2年C組	2位3年A組
3位2年C組 「栄光の架け橋」	3位3年A組	3位1年A組

（教育学部附属中等教育学校 野崎雅秀）

## 教育学部附属中等教育学校1期生（55回生）が自己推薦入試やAO入試で大学に多数合格!!

自己推薦入試やAO入試などの結果が出そろい、1期生（6年生）の昨年末までの大学進学状況がわかりました。それを見ると、このタイプの入試を選択して、合格している生徒が過去に比べてかなり増えてきたことがわかります。最近の傾向は私立大学に限らず、国公立大学にも合格していることです。今年も、例えば、お茶の水女子大学、筑波大学、名古屋大学、東京学芸大学、首都大学東京、学習院大学、慶応大学、上智大学、中央大学、立教大学などに合格者が出ています。指定校推薦を含めて学年の半分を越える61名の生徒がAO入試や自己推薦入試で合格しています。

なぜ6年生がこれほど優秀な結果を残しているのでしょうか。もちろん受験生を確保したいという大学側の意図や少子化による受験者数の減少なども影響しているでしょう。しかし、それだけでは説明のつかない理由があると考えています。その答えの1つとしては、彼らが学校生活の中で取り組んできたことを大学側にきちんと伝えるように話すことができ、しかもそれが高く評価されたということです。例えば、自主的に運営されている生徒会活動・部活動やさまざまな学習の集大成である「卒業研究」に対する評価です。

特に全員に課される「卒業研究」は、1年生の総合学習入門から始まった課題発見、レポート作成、プレゼンテーションなどの能力すべてを問われるものです。生徒達はその研究を進める過程で、自分の意見を論理立てて説明することや質問に対して適切に答えることが徐々にできるようになっていきます。6年生達は「この研究を論文や作品にまとめ上げた達成感と自信によって、次へのステップである進学にも前向きに取り組める」と話しています。つまり、卒研に取り組んだことで論文試験や面接試験においても堂々とした主張を展開することができ、その結果として合格を勝ち取る生徒が多いのです。これが東大附属の強さであり、本校での6年間の教育成果の1つと考えています。

（教育学部附属中等教育学校 細矢和博）



## 第2回 「移転」

### ＜医学部移転費のコストダウン＞

調達本部が初めて取り組んだ移転案件は「医学部教育研究棟（第Ⅱ期）」でした。実は、調達本部が医学部とこの件で連絡を取り合った時点では、医学部内でかなり移転計画が進んでいました。そこに調達本部としてコストダウンのための提案を持ち込んだ形となったために、若干の混乱もありました。

これまで各部局の移転は、研究の合間を縫って部局内の研究室単位に移転作業が繰り返される形が多くみられました。一研究室の移転が終われば作業員も作業器具類もいったんは引き上げ、また次の研究室の移転が始まるときに再度準備がなされるわけで、これはいかにも不効率・不経済なものです。



医学部教育研究棟

調達本部の提案は、移転作業に切れ目が生じないように研究室毎のスケジュールを組むこと、新規業者の参入を図ることでした。また、研究実験用の機材についても、一律に特殊な扱いとするのではなく、一般物品同様の運び方で差し支えないものがないかの再精査もお願いしました。

説明会が開かれ、各研究室からは無理なスケジュール調整で研究日程に支障が生ずる恐れがあること、また大切な研究実験機材が万が一故障でもしたら大変といった点で不安が呈せられました。これらの不安はよく理解できるものであり、2回にわたり4時間あまりじっくり話し合った結果、（途中何度か緊迫した場面もありましたが）何とか研究室と調達本部が一致できる移転計画にたどり着くことができました。

作業に切れ目が生じない移転スケジュール、一部研究実験機材の一般運送への切り替えそして新規業者を導入した入札の結果、医学部における計画段階の予定額に比べて34%（1億2,800万円→8,500万円）のコストダウンを実現することができました。

医学部の移転は、12月14日に無事に完了しました。今回得られたコストダウン成果は、一昨年12月の科所長会議で決定された「移転費の補足に関する原則」に従って、本部・医学部の間で措置されることとなります。

調達改善には、関係者に種々の検討と新たな負担をお願いせざるを得ない場面が登場しがちです。調達本部としては、今回同様に、関係する皆さんの理解と協力を得ながら、確実にコストダウンを進めていきたいと考えています。

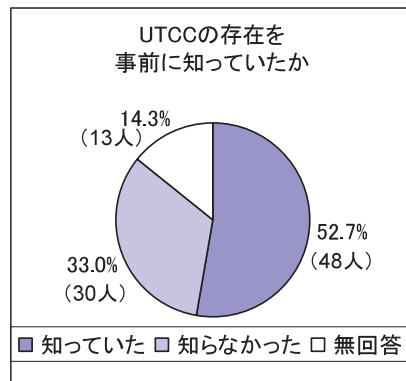
調達本部連絡先 ☎22148 櫻井

## ■経済学部学生によるアンケート実施

1月10日～14日の期間、経済学部の学生によってコミュニケーションセンターの来場者へのアンケートが実施され、91名の方から回答を得ました。今回は、そのアンケート結果の一部をご紹介します。

### ○ 利用者の事前認知は52.7%

店舗利用者の中で事前にコミュニケーションセンターを知っていた方は52.7%、知っていた方の認知経路は「テレビで」という回答がトップ、ついで「知り合い・家族から」という順になっています。



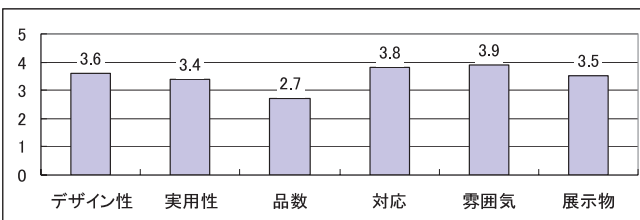
オープン以来、マスコミに取り上げていただく機会が多いたことが集客面で大きく貢献していることがわかります。

認知経路（複数回答）

認知経路	人数
テレビ	16人
知り合い・家族	14人
新聞・雑誌	9人
店舗の横を通って	11人

### ○ 店舗の雰囲気・対応への満足度は高いが、品揃えに不満

UTCCの店舗・商品についての満足度は、下のグラフのとおりで、5点満中店舗の対応が3.8、雰囲気3.9と比較的高いポイントとなっていますが、品揃えへの満足度は2.7と低い数値となっています。



\*各項目、不満1点、満足5点として1から5点で評価したものの平均値

アンケートでは、品揃えについて具体的なご要望をいただくなど、これからのコミュニケーションセンターの運営に役立つ声を多数いただくことができました。

経済学部の学生のみなさん、アンケートにご記入いただいたみなさま、ありがとうございました。

（担当：渉外本部 曾我）



The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター  
The University of Tokyo  
Communication Center

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30

電話：03-5841-1039

[http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/utcc01\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/utcc01_j.html)

スキー部

○競技スキーとは？

レジャーでスキーを楽しむ人は多くても、競技スキーと言われるとピンと来ない方は多いでしょう。競技スキーは以下の3つに大きく分かれます。

アルペン…赤と青のポールでできた旗門をいかに速くくぐり、駆け下りるかを競う競技。

ノーストラー…5 kmから30 kmという長距離を専用の板で走破し、そのタイムを競う競技。

ジャンプ…これは知っている人がほとんどでしょう。ジャンプ台から空中に飛び出し、飛距離を競う競技。

我が部では、この3つの競技全てを行っています。夏季は陸上でランニングや球技、筋力トレーニング等を通じて体力の向上がメインになりますが、12月になれば北海道で長期間の合宿を行い、思う存分スキーを楽しんでいます。

○大学から始めても強くなれる

高校までの競技経験者は少なく、大学から始める人がほとんどです。しかし、大学から競技を始めた選手でも努力次第で大会で活躍することは十分に可能です。スキー自体ほとんどやったことない者が、数年後には立派な選手に成長していることもしばしばです。

ここ数年間、全日本学生スキー選手権大会（通称インカレ）では、強豪校のひしめく2部で、周りの選手はほとんどが雪国出身の経験者という状況で戦い、残留してきました。今年1月のインカレでは惜しくも3部に降格してしまいましたが、国立大学では全国でも有数の強いチームです。来年度は部員一同、3部優勝で2部に再昇格することを目標に、オフシーズンからトレーニングを積んでいきたいと思えます。今後も応援宜しくお願いいたします！！  
(スキー部 永原 淳)



★★DATA★★

創立：昭和36（1961）年  
 人数：15名（選手13名、マネージャー2名）  
 練習場所：（オフシーズン）駒場地区グラウンド、御殿下記念館、代々木公園、荒川河川敷etc  
 （12月以降）北海道各地のスキー場、長野・白馬  
 練習日：オフシーズンは月・木・土。シーズンイン後は長期合宿を行い、大会に備えます。  
 年間予定：4月 新歓スキーツアー  
 8月 夏季陸上合宿  
 9月 秋季陸上合宿  
 12月 各パート雪上合宿（北海道各地）  
 1月 八大戦（5大学十一橋・神戸・東工）インカレ  
 2～3月 東京地区国公立大会 全日本国公立大会  
 今年度の成績：八大戦 総合2位  
 インカレ 2部23位（3部降格）  
 部長：西澤直子（大学院農学生命科学研究科教授）  
 HP：http://shibuya.cool.ne.jp/todaiski/

スケート部アイスホッケー部門

○アイスホッケーって？

皆さんはアイスホッケーというスポーツをただのマイナースポーツだと思っていないでしょうか？そんなことはありません。アイスホッケーは日本にも着実に浸透しつつあり、現に関東の大学にはほとんどアイスホッケー部が存在します。最近ではTVドラマ化や有名な雑誌での漫画化、福藤豊をはじめとする日本人プレイヤーの世界進出などにより、世間での認知度もかなり高くなっています。



アイスホッケーの魅力は何といってもそのスピード感と迫力。銀色に輝く氷上でプレイヤーが風のように走り、激しくからだをぶつけ合う。そのゲーム展開の速さと迫力あるプレーは決して見るものを飽きさせません。一度試合を見に来ればその魅力は確実に伝わるはず！

○我々の活動

我々はほとんどが未経験者という状況の中、推薦をとっていない学校の中ではトップクラスの位置を保ってきました。しかし昨年度は優勝が充分可能な実力を備えながらも関東大学3部リーグ5位という大変不本意な結果に終わってしまいました。

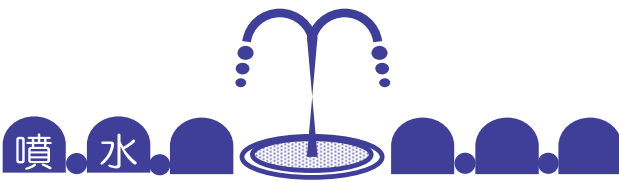
その反省を踏まえて今年度は「3部で確実に優勝し、2部に定着できるチーム」を作るべく練習に取り組んでいます。昨年度のレギュラーメンバーがほとんど残っているということもあり、今年は東大アイスホッケー部史上最強のチームを作ることも夢ではない状況にあります。今年のアイスホッケー部はやります！期待してください！  
(スケート部アイスホッケー部門 長崎 拓也)



★★DATA★★

創立：昭和13（1924）年  
 人数：25名（選手16名、マネージャー9名）  
 練習場所：シチズンアイススケートリンク（高田馬場）、東伏見アイスアリーナ、駒場周辺  
 練習日：月・火・木・金・土（1回2～3時間程度）  
 年間予定：4月 関東大学アイスホッケー選手権大会  
 5月 新歓合宿  
 8月 釧路合宿  
 9月 京大戦  
 10～11月 関東大学アイスホッケーリーグ戦  
 12月 七大戦  
 1月 冬合宿  
 3月 春合宿  
 今年度の成績：関東大学リーグ戦 3部5位  
 七大戦 4位  
 部長：堀井秀之（大学院工学系研究科教授）  
 監督：野澤剛二郎  
 HP：  
 http://www.hockeynuts.org/~utokyo/framebase.html





## 有馬朗人先生の句碑建立

平成17年12月22日、東京大学教職員、卒業生、東大銀杏会有志の後援を得、有馬朗人日本科学技術振興財団会長（元東京大学総長、文部大臣、科学技術庁長官、俳句同人誌「天為」主宰）の句碑が、東大三四郎池畔の山上会館庭園内に建立されました。当日行われた句碑開きには、林元副学長をはじめ東京大学の関係者の方々の参列も得て、多数の関係者が会し、厳かに開催されました。東京大学をはじめ関係者の方々から並々ならぬご尽力を頂いたことに深く感謝いたしたいと思ひます。

東大銀杏会の前身は東大ホトトギス会（山口青邨創設）であり、青邨先生亡き後、有馬主宰は、東大銀杏会と名付けて、15周年を迎えました。昭和61年に建立された青邨句碑の「銀杏ちるまっただ中に法科あり」の作品は昭和16年日米開戦の時に作られた作品です。明治以来日本の近代化のために官僚を送り出してきた東大法科の卒業生達が軍部の独走を阻止できなかったことに対する青邨先生の強い思いが厳しい抑制的表現の中に込められた名句です。私は昭和51年法学部卒業生として何時も襟を正す思いでこの作品に接しておりました。20世紀は戦争の世紀であり、その過ちをこの作品は三四郎池を訪れる人々に静かに語りかけてくれるのです。

しかし、朗人先生の「銀杏散る万巻の書の頁より」の作品は21世紀の新しい時代の希望に満ちた未来に対する東大の役割の大きな変化を高らかに詠った作品です。この地において、過去の過ちを超えて、世界の発展のための拠点として広く多くの人々に情報発信をせよ、そうして東大は世界の平和に貢献できるのだということを詠っているのです。

青邨先生の上五「銀杏ちる」の響に倣いながらも、この二句が並ぶ事によって世紀を超えた歴史と時代の変化を響き合わせながら、三四郎池を訪れる多くの人々に平和の意味を語りかけてくれるのです。

天為事業部長 俳人 西村我尼吾  
(昭和51年 法学部卒業)



## ニュースページ、インフォメーションページ への記事提出要領

「学内広報」は皆さんに送っていただく記事で作られています。下記の提出要領により、積極的に学内の情報をお寄せください。

### 1. 提出方法

記事は、各部局の広報担当者をとおして、メールの添付ファイルとしてデータで送付すること。

### 2. 提出先

総務部広報課

E-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

### 3. 締切日

原則として毎月第1・3水曜日を原稿の締切日とする（配布は翌々週の火曜日）。ただし祝日等により変更となる場合があるため、HPで発行スケジュールを確認すること。

### 4. 提出の際の留意事項

#### (1) 文字数

文字数は記事1件につき800字を目安とし、内容により増減は可とする。

#### (2) 写真

- ① 写真を掲載する場合はキャプション（説明文）を25文字以内で添えること。
- ② 写真を電子データで提出する場合、Wordファイルなどに貼り付けず、JPEGなどの形式による元の画像ファイルを送付すること。
- ③ 写真は電子データがない場合プリントのものも掲載可とする。

#### (3) 書式

- ① 原稿は1行25文字の書式で作成すること（ただし、大きな図表などが含まれる場合はこの限りではない）。
- ② 原稿のはじめに担当部局名と記事タイトルを記載すること。
- ③ 記事タイトルは極力簡潔でわかりやすいものとする。

#### (4) 文章表現のきまり

- ① 既に行われた行事や決定した事項などの報告記事は、「である調」を用いること。
- ② これから行われる行事や募集などのお知らせは、「ですます調」を用いること。
- ③ 句読点は「、」「。」を用いること（「，」「.」は用いない）。
- ④ 時間は24時間表記とし、日付には括弧書きで曜日をつけること。
- ⑤ このほか、特に表記する必要のない「平成●年」は削除する、特に支障がない限り「東京大学」は「本学」とするなど、表記の統一のための修正を編集段階において行う。

### 5. 問い合わせ先

総務部広報課広報企画チーム

TEL : 03-3811-3393 内線22031

E-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

# INFORMATION

## シンポジウム・講演会

### シンポジウム・講演会

分子細胞生物学研究所

### 「東京大学の生命科学」シンポジウム

本学では10を超える学部・研究科・研究所において、多様な生命科学の研究が進められています。地球上の生命の多彩な広がりやその不思議から人間の病気や心理にいたるまで、本学の様々な領域の研究者から、最先端の話をわかりやすくご紹介するシンポジウムを開催します。多くの学生、院生、研究者の方の参加を期待します。

■日時／4月15日（土）10:00～17:20

■会場／本郷キャンパス・安田講堂

■参加費／無料

■ホームページ

[http://www.iam.u-tokyo.ac.jp/ut\\_bio.html](http://www.iam.u-tokyo.ac.jp/ut_bio.html)

### ■プログラム

10:00～10:10 開会挨拶 小宮山 宏 総長

<座長 斎藤春雄（医科学研究所）>

10:10～10:30 薬学系研究科堅田利明  
「Gタンパク質によるシグナル伝達の制御」

10:35～10:55 医学系研究科飯野正光  
「細胞のスイッチとしてのカルシウム」

11:00～11:20 総合文化研究科安田賢二  
「1細胞から生命システムを創る」

11:25～11:45 生産技術研究所竹内昌治  
「タンパク質を探るマイクロ・ナノマシン」

11:50～12:10 分子細胞生物学研究所渡邊嘉典  
「ゲノム伝達のしくみ」

12:15～13:30 休憩

<座長 山本正幸（理学系研究科）>

13:30～13:50 情報理工学系研究科神崎亮平  
「昆虫の脳にひそむ知のしくみ」

13:55～14:15 海洋研究所塚本勝巳  
「動物はなぜ旅をするのか」

14:20～14:40 農学生命科学研究科祥雲弘文  
「微生物による窒素循環と地球環境」

14:45～15:05 工学系研究科古米弘明  
「湖沼における溶存有機物の動態と細菌群集の応答」

15:10～15:30 休憩

<座長 入村達郎（薬学系研究科）>

15:30～15:50 新領域創生科学研究科高木利久  
「システムの理解に向けた生物知識の統合化」

15:55～16:15 理学系研究科久保健雄  
「ミツバチの社会性行動を規定する脳と遺伝子の仕組み」

16:20～16:40 先端科学技術研究センター油谷浩幸  
「ヒトゲノム機能情報の解明：ゲノムからエピゲノムへ」

16:45～17:05 医科学研究所河岡義裕  
「エマージングウイルスの謎」

17:10～17:20 閉会挨拶 浅島 誠 実行委員長

17:30～ 懇親会 会場／山上会館  
参加希望者は下記連絡先まで  
(懇親会費：学生1,000円・有職者3,000円)

■連絡先／〒113-0032 東京都文京区弥生1-1-1  
東京大学分子細胞生物学研究所 伊藤  
TEL : 03-5841-7800 E-mail : ito.m @ iam.u-tokyo.ac.jp

# お知らせ

## お知らせ

### 退職教員の最終講義

今年度末をもって本学を退職される方々の最終講義・講演について、下記のとおりお知らせします。

#### 大学院医学系研究科・医学部

上野 照剛 教授

(生体物理医学専攻 医用生体工学講座 生体情報学分野)

日時：3月9日(木) 14:00~16:00

会場：医学部2号館大講堂

演題：磁気と共に40年 ―生体磁気と脳磁気科学の魅力―

若井 晋 教授

(国際保健学専攻 国際社会医学講座 国際地域保健学分野)

日時：3月15日(水) 16:30~17:30

会場：医学部2号館小講堂

演題：人びととともに

橋都 浩平 教授

(生殖・発達・加齢医学専攻 小児医学講座 小児外科学分野)

日時：3月16日(木) 16:00~17:30

会場：医学部教育研究棟 鉄門記念講堂

演題：ブラックボックスから患者へ：胎児診断と胎児治療の進歩

#### 大学院工学系研究科・工学部

岡部 洋一 教授

(電子工学専攻・電子工学科 情報基盤センター・センター長)

日時：2月21日(火) 14:30~16:30

会場：山上会館2階大会議室

演題：(特に演題を予定しておりません)

矢木 修身 教授

(附属水環境制御研究センター)

日時：平成18年2月17日(金) 15:00~17:00

会場：工学部14号館1階141講義室

演題：環境バイオテクノロジー学の構築に向けて

#### 大学院人文社会系研究科・文学部

宇田川 洋 教授

(附属北海文化研究常呂実習施設)

日時：3月10日(金) 15:00~16:00

会場：山上会館大会議室

演題：博物館学試論

後藤 直 教授

(基礎文化研究専攻考古学講座)

日時：3月10日(金) 16:00~17:00

会場：山上会館大会議室

演題：青銅器の石製鋳型

#### 大学院情報理工学系研究科

岡部 靖憲 教授

(数理情報学専攻 数理情報学原論大講座 確率情報学研究)

日時：2月27日(月) 15:00~17:00

会場：工学部6号館2階63号講義室

演題：実験数学とその夢

#### 大学院新領域創成科学研究科

渡邊 達三 教授

(環境学専攻自然環境学大講座)

日時：2月18日(土) 16:00~17:30

会場：東京大学農学部7号館B棟2F講義室

演題：自然環境形成学のあり方について



## お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

### 「教養学部報」第490（2月1日）号の発行 ——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

第490（2月1日）号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

今井知正：駒場祭を顧みて

黒田玲子：科学技術インタープリター養成プログラム  
——何を伝えるか、どう伝えるか

石田 淳：ノーベル賞《平和》組み合わせのアイロニー  
——経済学賞と平和賞

久保田俊一郎：生活習慣病について

米谷民明：物理学の未解決問題——相対論と量子論の統一

〈駒場をあとに・送ることば〉

小林寛道：駒場を後に

跡見順子：小林寛道先生を送る——その名の如く寛容の  
心で人の道を切りひらく

伊藤亜人：駒場を満喫した私

木村秀雄：伊藤先生を送る

油井大三郎：二つの「十年」

遠藤泰生：油井大三郎先生を送る

〈学び方〉新シリーズ

伊藤たかね：言語学の学び方——ことばの使用の背景に  
ある知の体系を探る

山影 進：国際関係を学ぶ

〈シンポジウム〉

内山 融：変化の中の日本政治——第17回関連社会科学  
シンポジウム要録

谷垣真理子：和解のための歴史を求めて——ヨーロッパ  
とアジアの対話

〈本の棚〉

安西信一：本村凌二著『多神教と一神教——古代地中海  
世界の宗教ドラマ』

森井裕一：中澤英雄著『カフカとキルケゴール』

〈時に沿って〉

佐藤安信：「人間の安全保障」と「平和構築」——学問  
と実務の循環をめざして

## お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

### 2005年度美術博物館所蔵品展開催のお知らせ

美術博物館では、1月23日（月）より2005年度美術博物館所蔵品展を開催しています。

#### 「一高・東高コレクション展Ⅱ－旧制高校と入学試験」

〈概要〉当館では東京大学教養学部の前身である旧制第一高等学校、旧制東京高等学校に関係する史料を所蔵しており、定期的に所蔵品展を開催しています。今回は、これら戦前の旧制高校で「入学試験」という制度がどのように形成され展開したかを、日本の近代化の歩みの中で振り返ります。入試問題も多数展示します。

#### 「レオナルド・ダ・ヴィンチの複製素描画Ⅳ」

〈概要〉当館が所蔵する絵画資料の中から、レオナルド・ダ・ヴィンチ生誕500年を記念して、1952年にユネスコが作成したレオナルド・ダ・ヴィンチ複製素描画をご紹介します。この素描シリーズは、全部で86点からなり、4つのグループに分けられています。当館では、昨年度よりこのシリーズを順次公開してきましたが、今回はその中からグループⅣに属する27点を展示します。

●会期：1月23日（月）～3月10日（金）

●開館時間：月～金10時～17時

●休館日：土日祝祭日および大学が定める休日

●問合せ先：TEL 03-5454-6139 FAX 03-5454-4929

●ホームページ：<http://tdgl.c.u-tokyo.ac.jp/~bihaku/>

石川吉右衛門名誉教授

名誉教授石川吉右衛門先生は、平成17年8月12日逝去されました。享年85歳でした。

先生は、大正8年10月23日千葉県木更津市にお生まれになり、昭和18年9月25日東京帝国大学法学部法律学科卒業、大学院特別研究生を経て、

23年12月21日東京大学助教授就任、32年7月1日教授に昇進され、55年4月1日定年の故をもって退職されるまで研究教育と多数の研究者育成に尽力され、同年5月には名誉教授の称号を授与されました。定年退職後は、千葉大学、東海大学でも教鞭を執られました。

先生は、労働法学、とりわけ戦後成立した労働組合法の基礎理論の確立に取り組み、同法の理念を「円滑な団体交渉の実現」を中心に据えた透徹した理論体系を構築されました。その成果は名著『労働組合法』（有斐閣・昭和53年）に集大成されましたが、その他にも、公共部門労働法、懲戒権、賃金、労働時間等労働法全般にわたる優れた論文・著書によって戦後の労働法学の確立に多大の貢献をなさいました。

先生は、理論面のみならず、労働委員会における実務および労働行政においても特筆すべき貢献をされました。労働委員会関係では、昭和27年以来東京都地方労働



委員会、公共企業体等労働委員会、中央労働委員会の公益委員を歴任、昭和59年11月から平成4年10月までの8年間は中央労働委員会会長として不当労働行為事件の解決に奮闘され、多くの難事件をその卓越した識見と豊富な学識そして明朗闊達な人柄と包容力で解決されました。とりわけ、国民の関心を集めたJR国労組合員事件の解決には心血を注がれました。労働行政分野では、中央労働基準審議会会長、中央家内労働審議会会長、労働基準法研究会会長等を歴任され、労働行政の展開をリードされました。労働行政以外でも著作権審議会委員、郵政審議会委員、日本国有鉄道諮問委員会委員、学術審議会委員、大学設置審議会専門委員、司法試験考査委員、産業労働懇話会委員等を務められました。こうした学界・実務界におけるご功績により、昭和53年に藍綬褒章、59年に紫綬褒章、平成3年には勲一等瑞宝章を授与されました。

石川先生は、本学において長年にわたり応援部の部長をお務めになり、学生達から最も敬愛された法学部教授のお一人でいらっしゃいました。多くの教え子達が参列した通夜・告別式には応援部旗が掲げられ、最後のお別れの際には「ただ一つ」が湧き起こり、応援部OBによるエールによって送られました。石川先生のお人柄の偲ばれる心に残るお別れの会でした。ここに先生の卓越したご功績と暖かいお人柄を偲びつつ、謹んで哀悼の意を表します。

(大学院法学政治学研究科)

## 井上信幸名誉教授

本学名誉教授井上信幸先生は、平成18年1月18日午後5時2分に大腸癌のためご逝去されました。享年68歳でした。通夜、葬儀・告別式は逗子市二葉会館斎場にて執り行われ、あいにくの大雪にもかかわらず、先生を偲んで多数の方々が参列されました。

井上先生は昭和36年3月に京都大学理学部物理学科を卒業後、同大学院理学研究科に進学されました。昭和38年12月には同大学院博士課程を中退され、直ちに名古屋大学プラズマ研究所助手に就任されました。昭和46年11月には東京大学工学部に移られ、原子力発電工学講座の助教授としてプラズマ核融合学の研究と教育を担当され、昭和59年11月には教授に昇任されました。平成8年10月には京都大学エネルギー理工学研究所教授に移られ、所長としてその運営に寄与された後、平成13年3月に京都大学を退官されました。この間、平成10年5月には東京大学名誉教授の称号を受けられました。

先生はプラズマ核融合分野の草分けとして活躍された世界的権威であり、東京大学においてこの研究分野をゼロから立ち上げることに尽力されました。特に、本学にトカマク型プラズマ実験装置TORIUTおよび逆転磁場ピンチ型プラズマ実験装置REPUTEを建設し、トラス・プラズマの大電流化、高効率化、プラズマの巨視的不安定性の安定化等において独創性の高い重要な成果をあげられ、磁場閉じ込め核融合の発展に大きく貢献されました。



先生が進められたご研究は、大学に最先端研究の場をつくりだし、そこで多くの学生が育ちました。先生のおおらかなお人柄と、大胆でありながら精緻なご研究に憧れて、多くの学生がプラズマ核融合学を志し、ご在任中の25年の間に20人を超える博士を輩出されました。これらの卒業生は現在、プラズマ核融合研究の中堅として世界で活躍しています。先生はまさにこの分野の基盤を作られました。

また、先生は学外にあっても長きにわたりプラズマ核融合分野のリーダーとして活躍されました。昭和63年から平成10年まで、文部省学術国際局科学官を務められ、わが国の大学、研究機関における原子力研究、核融合研究に係る国策の決定に対して重要な貢献をされました。核融合炉開発のための国際的な共同実験計画である国際熱核融合炉ITERに関しては、昭和62年から国際原子力エネルギー機関（IAEA）ITER科学技術顧問、およびITER技術顧問としてその推進にあたられました。また、原子力委員会核融合専門部会委員、日本原子力産業会議核融合開発検討会委員長などを務められました。さらに、日本原子力学会、プラズマ核融合学会の理事を務められ、平成11年から15年にはプラズマ核融合学会の理事長も務めておられます。

昨年の後半から体調を崩されていると聞いておりましたが、あまりに急なご逝去の報に接し、国内外の関係者は大きな衝撃を受けております。ITERの建設が始まり、プラズマ核融合研究が新しい時代に入ろうとしている今、井上先生を失うことは、東京大学のみならず世界の研究者にとって痛惜の念に堪えません。ここに謹んで哀悼の意を表し、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(大学院工学系研究科)

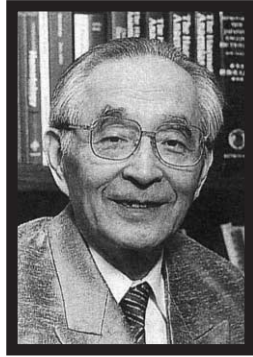
### 三輪史朗名誉教授

本学名誉教授三輪史朗先生は、平成18年1月12日にご逝去されました。享年78歳でした。通夜、葬儀・告別式は護国寺にて執り行われ、先生を偲んで多数の方々が参列されました。

先生は昭和26年に東京大学医学部を御卒業になり、同第3内科学教室で臨床血液学の御研鑽をつまれ、米国留学中の昭和36年に医学史上に残る業績であるピルビン酸キナーゼ欠乏症を発見されことを契機に溶血性貧血と赤血球エネルギー代謝に深い関心を抱かれました。帰国後、放射線医学総合研究所、虎ノ門病院、山口大学医学部、東京大学医科学研究所、さらに沖中記念成人病研究所と場を移されながらも、40年以上にわたって一貫して、この分野の血液学の臨床と教育、さらに世界をリードする研究を絶えず精力的に進めてこられました。先生の症例発掘におけるご努力とたゆまぬ研究姿勢によってわが国の溶血性貧血の症例の大部分は先生のもとに集中しました。その研究業績は「赤血球酵素異常による遺伝性溶血性貧血」という新しい疾患群の存在と病因を明らかにすることにより、従来原因不明なままの確な医療ができなかった症例に、病因に応じた治療対策を可能にされたことです。このような先生の一貫した溶血性貧血と赤血球エネルギー代謝に関する研究業績に対しては、昭和46年ベルツ賞、昭和54年日本人類遺伝学賞、昭和56年武田医学賞、昭和58年日本医師会賞、平成2年紫綬褒章、平成9年学士院賞、平成11年勲2等瑞宝章がそれぞれ授与されました。

医科学研究所の前身である伝染病研究所は北里柴三郎博士により創立され、東京大学に移管された後も、百年余の長きにわたり、それぞれの時代における難治性疾患の基礎および臨床研究の中核としてその役割を果たして参りました。

先生は昭和54年5月、新設されて間もない病態薬理学研究部の教授として医科学研究所に赴任され、附属病院血液内科の診療科長も兼務されました。当時いくつかの条件が重なって病院の稼働率は悪化し、いっぽう他の国立大学附置研究所が改組や学部への吸収などでその設置形態を変えていくという厳しい状況の中で、医科学研究



所はプロジェクト病院という新しい運営形態を考案しました。そして、何をプロジェクトに選ぶかの議論が難渋する中で、先生が提案された「細胞・臓器移植センター案」を骨子とする「白血病など難治性血液疾患の治療のための細胞移植」が第一候補となり、病院は新たなスタートをきったのです。先生には8年の間教授として研究・診療・教育に御尽力いただきましたが、特に退官前の2年間は、お身体に支障をきたしながらも病院長として奔走され、わが国最初の20床という大無菌病棟の建設や骨髄移植療法の保険適応を達成してくださいました。そのお陰で病院はその後実績を積み上げ、わが国有数の細胞移植センターとして現在に至っております。また、前述した先生のご提案に対して研究所の基礎研究者は、将来これに遺伝子診断、遺伝子治療が続くことを期待しました。今日、ゲノム解析センターの設立を経て医科学研究所はわが国のゲノム医科学研究の一大拠点となっております。また、わが国最初のがん遺伝子治療の臨床研究が附属病院で実施されたことを考えあわせると、先生の播かれた種が医科学研究所の中で着実に育っていることを実感します。

先生は御退官後もつい最近まで創立記念日や教授総会忘年会、病院同窓会など研究所の行事には必ずご参加をいただいております。先生がどれだけ医科学研究所を愛し、かつ暖かく見守っておられるかがよくわかり、所員一同大変感謝し、大いに元気づけられておりました。先生がその存続と発展に尽力された病院も一昨年新棟がオープンしましたが、その最上階のホールで夜景を楽しみながら、医科学研究所と病院について語り合っていたのが、つい昨日のここのように思い出されます。国立大学独立法人化という変革を経て、21世紀の医科学研究所が新たな目標に向かって邁進しようとするこの時期に、私たち後輩にとって大きな励ましとなっておられた先生が亡くなられたことは、研究所にとってもまことに大きな損失であります。後に残された私たちは、先生が愛してやまれなかった医科学研究所と病院をますます発展させることがご遺志を継ぐことであると再認識し、世界的な視野で医科学研究所を発展させる努力を継続することをお誓い申し上げます。

ここに三輪先生の卓越したご功績と温かいお人柄をしのびますとともに、謹んで哀悼の意を表します。

(医科学研究所)

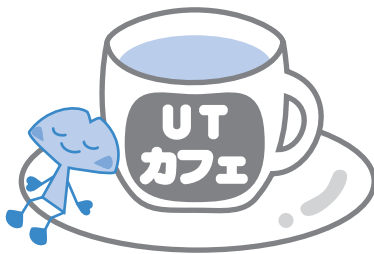
## 人事異動（教員）

発令年月日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退職）			
18.1.15	竹田 扇	辞 職（山梨大学大学院医学工学総合研究部教授）	大学院医学系研究科助教授
18.1.31	横溝岳彦	// （九州大学大学院医学研究院教授）	大学院医学系研究科助教授
（採用）			
18.1.16	長尾恭光	教養学部附属教養教育開発機構助教授	京都大学大学院農学研究科助手
18.2.1	中川一路	医科学研究所附属感染症国際研究センター助教授	大阪大学大学院歯学研究科講師
（昇 任）			
18.1.16	寺本 進	大学院工学系研究科助教授	大学院工学系研究科講師
18.2.1	小川利久	大学院医学系研究科助教授	医学部講師
//	俣野哲朗	医科学研究所附属感染症国際研究センター教授	大学院医学系研究科助教授

※ 東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。







### 隠し味のある広報誌に

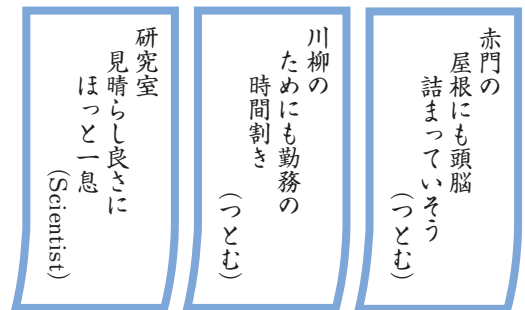
いつも楽しく読ませていただいています。今回の表紙のミイちゃんはかわいくて、思わず見入ってしまいました。少し希望を述べると、東大にまつわる、役に立たない小ネタのコラムがあると、次回が楽しみになります。また、写真をもう少し明るく、被写体の表情が分かる構図にして欲しいです。さらに良い広報誌になるよう、期待しています！  
(ペンネーム・午後の紅茶)

### 学内広報見ました

配布前に掲示してあったポスターのおかげで配布日がとても待ち遠しかったです（^^） 毎回あるとよいなあ…と思いました。本誌も、段組やページの構成などが工夫されて以前より読みやすくなったと思いました。ただ、INFORMATIONとNEWSと区別されてわかりやすくなったけど、INFORMATIONは、背景色で文字が読みにくくなっている気がしました…  
(とくめいきぼう)

### 味わいのある紙面に期待します

「学内広報」といえば、部局のニュースがずらずらと載っていて、ときどき入学式の祝辞や人事異動一覧がおかずみたいに入っている、という印象で、全部読んだことはなかったと思います。リニューアルしたというのでよく見ると、見せ方の工夫が結構してあって、ページのところが青丸で塗ってあるのとか、グレー地にしてあるページとか、こういうのって、「学内広報」らしくないといえばそうだけど、手作りっぽい特集ページとか、なんか人間味が出てきて、とりあえず目が行く気がします。疑問なものもあって、留学生数の統計表が寝かして入っているけど、縦に整形ぐらいしたらどうでしょうか。しかも、このデータから何を言いたいのかわかんない。  
(ペンネーム・げんぼう)



## このコーナーへの投稿方法

UTカフェは読者コメントを掲載するコーナーです。「学内広報」に掲載された記事に関するご意見・ご感想をはじめ、学内の様々な事柄に関して常々思っていることなどを、気軽にお寄せください。投稿はEメールで受け付けます。メールの本文に以下の項目を記入し、下記アドレスまでお送りください。メールの件名は「意見」としてください。誌面への掲載はペンネーム・匿名が可能ですが、連絡用として投稿の際には氏名・所属をご記入ください。

### <投稿先メールアドレス>

kouhou-ex@adm.u-tokyo.ac.jp

### <記入項目>

- ①氏名・所属 ②連絡先電話番号 ③本名・匿名・ペンネームの希望
- ④タイトル（20字以内） ⑤本文（300字以内）

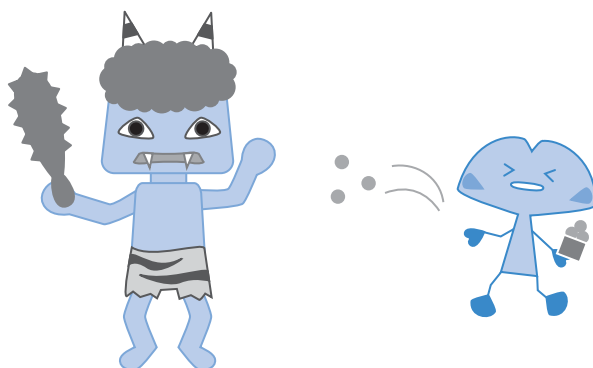
### 「東大川柳」も同時募集

「UTカフェ」では、東京大学をテーマにした「東大川柳」も同時募集します。優秀作は不定期で「UTカフェ」に掲載します。川柳の投稿の際には、メールの件名を「川柳」とし、④に川柳をご記入ください（⑤はなし）。



# EVENT LIST

行事名	日時	場所	連絡先・HP等
社会科学研究所 月例スタッフセミナー 「社会科学研究所における研究生活」	2月14日(火) 15:00~	社会科学研究所 大会議室	社会科学研究所 http://jww.iss.u-tokyo.ac.jp/
東文研セミナー 「アルジャイ石窟の興亡から見たモンゴルの仏教信仰の歴史的変遷」	2月15日(水) 15:00~	東洋文化研究所 3階第一会議室	東洋文化研究所 http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/ 永ノ尾信信 Tel:03-5841-5867 E-mail: seino@ioc.u-tokyo.ac.jp
21世紀COEものづくり経営研究センターシンポジウム 「ものづくり経営とひとつづくり」	2月16日(木) 13:00~	安田講堂	日経ビジネスクリエーション塾事務局 TEL:03-5452-2505 受付時間:10:00~17:00(土、日、祝日は除く) http://www.adnet.jp/nikkei/bizcre/04.html
第7回東文研シンポジウム 「Elites in Asian History: Social Network and Cultural Representation」	2月18日(土)10:00~ 19日(日)10:00~	東洋文化研究所 3階大会議室	東洋文化研究所 http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/ 中里成章(nakazato@ioc.u-tokyo.ac.jp, 03-5841-5864) 平野明子(hirano@ioc.u-tokyo.ac.jp, 03-5841-5880)
東文研セミナー 「Cultural Diversity: Key to Future Relations of the West with the Third World」	2月22日(水) 15:00~	東洋文化研究所 3階第一会議室	東洋文化研究所 http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/ 長澤栄治 nagasawa@ioc.u-tokyo.ac.jp
東文研セミナー 「エチオピア・コーヒー：コーヒー発祥の国」	2月22日(水) 18:00~	東洋文化研究所 3階大会議室	東洋文化研究所 http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/ 池本幸生 Tel.03-5841-5877
東洋文庫特別講演会 「Poets, Patronage, and the Place of Persian in the Early Modern World.」	3月7日(火) 15:00~	財団法人東洋文庫	東洋文化研究所 http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/ 森本一夫 morikazu@ioc.u-tokyo.ac.jp
日本社会研究情報センター 創立10周年記念シンポジウム	3月8日(水) 13:30~	山上会館	S S J データアーカイブ担当(福田) E-mail: ssjda-sympo@iss.u-tokyo.ac.jp http://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/sympo20060308.html
東文研セミナー 「Palaces, Cities, and Landscapes: Topographical Themes in Early Modern Persian Poetry.」	3月11日(土) 15:00~	東洋文化研究所 3階第一会議室	東洋文化研究所 http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/ 森本一夫 morikazu@ioc.u-tokyo.ac.jp
原洋之介教授 最終研究報告 「アジア研究と経済学の狭間で」	3月16日(木) 14:00~	東洋文化研究所 3階大会議室	東洋文化研究所 http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/
「東京大学の生命科学」シンポジウム ※18ページ参照	4月15日(土) 10:00~	安田講堂	分子細胞生物学研究所 伊藤 TEL:03-5841-7800 FAX:03-5841-1458 E-mail: ito.m@iam.u-tokyo.ac.jp http://www.iam.u-tokyo.ac.jp/ut_bio.html
行事名	開催期間	場所	連絡先・HP等
21世紀COEものづくり経営研究センター 「ものづくり寄席」	10月~3月	三菱ビルコンファレンススクエア アエムプラス (東京駅丸の内南口)	ものづくり経営研究センター 03-5841-2272 http://www.ut-mmrc.jp/topics/yose.html
「重井陸夫博士コレクション ウニの分類学」展	10月15日(土)~ 4月16日(日)	総合研究博物館本館	総合研究博物館 ハローダイヤル 03-5777-8600 http://www.um.u-tokyo.ac.jp
特別展示『アフリカの骨、縄文の骨—遙かラミダスを 臨む』展 ※1326号参照	11月26日(土)~ 4月16日(日)	総合研究博物館本館	総合研究博物館 ハローダイヤル 03-5777-8600 http://www.um.u-tokyo.ac.jp
2005年度美術博物館所蔵品展 「一高・東高コレクション展II—旧制高校と入学試験」 「レオナルド・ダ・ヴィンチの複製素描画IV」 ※20ページ参照	1月23日(月)~ 3月10日(金)	大学院総合文化研究科・教養学部 美術博物館	総合文化研究科・教養学部 美術博物館 TEL:03-5454-6139 FAX:03-5454-4929 http://tdgl.c.u-tokyo.ac.jp/bihaku/
21世紀COE国際ワークショップ International Workshop on Energy Budget in the High Energy Universe	2月22日(水)~ 24日(金)	柏キャンパス総合研究棟 6階大会議室	http://ebhu.astron.s.u-tokyo.ac.jp/index.html
第104回(平成18年春季)東京大学公開講座 「人口」	4月1日(土)、8日(土)、 22日(土)、5月13日(土)、 20日(土)	安田講堂	(財)東京大学総合研究会 担当:徳久 TEL:03-3815-8345 FAX:03-3816-3913 http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/d04_01_01_j.html



# Contents

## 特別記事

「バリアフリーの東京大学」の実現に向けて	2
----------------------	---

## NEWS

### 一般ニュース

平成18年度大学入試センター試験終わる	6
東京大学初主催「卒業生による業界研究会」を開催	6
赤門で消防演習が行われる	6

### 部局ニュース

日英プロジェクト第2回AJA、英国ウォーリック大学で開催される	7
新たな通用門の名称が「鉄門」に決定	9
大学院総合研究科・教養学部第二期運営諮問会議、開催される	9
三鷹国際学生宿舎で「新年会」開催される	10
教育学部附属中等教育学校で三者協議会開催	11
パキスタン上院議員訪問団が地震研究所を来訪	11
空間情報科学研究センター第8回年次シンポジウムを開催	12

## コラム

◆(噴水) 教育学部附属中等教育学校で「音楽祭」開催される	14
◆(噴水) 教育学部附属中等教育学校1期生(55回生)が自己推薦入試やAO入試で大学に多数合格!!	14
◆調達本部です 第2回	15
◆コミュニケーションセンターだより No.12	15
◆Flags運動部紹介 No.8	16
◆(噴水) 有馬朗人先生の句碑建立	17

## INFORMATION

### シンポジウム・講演会

「東京大学の生命科学」シンポジウム	18
-------------------	----

### お知らせ

退職教員の最終講義	19
「教養学部報」第490(2月1日)号の発行——教員による、学生のための学内新聞——	20
2005年度美術博物館所蔵品展開催のお知らせ	20

## 訃報

石川吉右衛門名誉教授	21
井上信幸名誉教授	22
三輪史朗名誉教授	23

## 事務連絡

人事異動(教員)	24
----------	----

## UTカフェ

	25
--	----

## EVENT LIST

	26
--	----

## 淡青評論

実り豊かな研究をめざして	28
--------------	----

- ◆ 表紙写真 ◆ センター試験当日、雪模様の本郷キャンパス(6ページに関連記事)

## 編集後記

昨年10月から本学で働き始め、学内広報を初めて見ましたが、学内広報はある意味、時代の先端を行く民主的なメディアと言えるのではないのでしょうか。職業記者ではなく草の根の「市民記者」のような人が記事を寄せるというスタイルのメディアが今世界中で注目されていますが、学内広報もそれに近いスタイルを取っています。実際編集していて、熱のこもった感動的な原稿に出会うこともしばしばです。皆さんもぜひお気に入りを探してみてください。(と)



七徳堂鬼瓦

## 実り豊かな研究をめざして

医学・生物学者としては少々恥ずかしいことだが、今年になって初めて、カーソンの名著「沈黙の春」（新潮文庫）を読んだ。いわゆる“害虫”を駆除するのに、1940-50年代の生物学者や企業が様々な試みをするのだが、多くは失敗に終わる。あるいは、前よりも悲惨な状況を招いてしまう。人類の科学の、失敗の歴史とっていい。商業的利益の追求が解決を遅らせたことの一要因であることも、肝に銘じなければならないことだが、我々の理解しえた科学・生物学が、いかに全体を見る視野に欠ける危険性をもっ

ているか、ということも示している。

研究を進める上で、「木を見て森や山を見ない。」の状況に陥らないよう、我々研究者（特に、医学生物学研究者）は自省する必要があることを示しているのであろう。そういう点では、医学生物学者は、どれだけ生物・細胞・病気、に対して全体像を把握するセンスがあるか、あるいは、どれだけ生物・細胞・病気、を愛することができるか、は、質の高い研究を進める上で非常に重要な点であると思う。ではそれを培うにはどうすべきか。やはり、幼児期から思春期までに、家庭や学校で、どれだけ「生きた生物」に出会い、驚き、可愛がる機会に恵まれたか、は大事なことではないか。教育の現場は、より一層この点に配慮していただければ、と切望する。

国際会議で驚くことのひとつに、欧米では「がん」などの病気の研究にも、Ph.D.すなわち、理学系の基礎研究者が積極的に参加している点がある。日本からは、M.D.すなわち、医学部出身者が約半分を占めることが多い。日本における医学部出身者から基礎研究者への流れ、という面を示すと同時に、理学部出身者・学生が“病気の不思議さ、病気の分子生物学的な面白さ・重要さ”に触れて、感激する機会が、我が国ではまだまだ少ないのではないかと、とも思ってしまう。領域を超えた視野をもつことは、研究のブレイクスルーに繋がるばかりでなく、「沈黙の春」で科学者が犯した誤りを未然に防ぐことにもなるのではないかと。

渋谷正史（医科学研究所）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1329 2006年2月8日  
**東京大学広報委員会**

〒113-8654  
 東京都文京区本郷7丁目3番1号  
 東京大学総務部広報課  
 TEL：03-3811-3393  
 e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp  
<http://www.u-tokyo.ac.jp>